

「大人のまなびを学ぶ」

講演 青山学院大学社会情報学部教授 荻宿俊文

講演を聴いてくださる方へ

現在ほど専門性への依存と不信が混交している時代はないかもしれません。

専門性は完璧性と取り違えられ、小さな落ち度も完璧ではなかったことが問いただされ、前後の脈絡を無視した落ち度だけが一人歩きし、専門性の否定につながり、不信すら持たれてしまいます。その上、その不信の責任は、小さな落ち度にもっとも近くにいた現場の最前線の人間に持たされてしまうことすらありうる状況です。

これらのことは1980年代初頭、トフラーの「第三の波」で言われた情報革命の結果なのでしょうか？トフラーは情報革命によって医療を代表とする専門家しか知らなかった専門的知見は誰でも検索出来るようになり、医療の専門家はこの専門的知見にアクセスできる一般の人に対応していくことが求められるという趣旨のことを述べています。私は、専門性への依存と不信が専門的な情報へのアクセスだけの問題ではないように感じています。

医療現場の最前線では、この不完全な人間が不完全な人間に医療行為をしていくときに、完璧を求められる圧迫感の増加に戸惑いが深まっていくことを感じているのではないかと私は考えています。

なぜなら、私の専門にしている教育や学習を扱っている分野の最前線である学校教育でも同様のことがあるからです。もしそうであるならば、教育の現場で起こりつつある学ぶことの再定義を援用していくことが医療現場の最前線に立つ皆さんにも示唆のあるエピソードになると思います。

では、学ぶことの再定義とは何でしょうか？

それは、学習は教え手と学び手の関係性の中で成立しているということです。小学校の教育を考えると、九九を習ったり、漢字を習ったりしていき、先生の持っている知識を得ることが重要でした。しかし、学習は知識を獲得していくことだけではなく、他者との間に前提条件を確認し合い、目的を共有し、その目的を達成するために、分業的な部分も加味しながらも、協働で作りに上げていき、一度、出来上がったことを吟味しながら、円環的に学んでいくという意味を生成していく学習に注目が集まってきています。

そのために、「大人がまなびを学ぶ」というキーワードで示したような俯瞰的な学習や省察的な学習をワークショップという方法論に載せて紹介させていただきます。